伏見城跡・桃陵遺跡　発掘調査

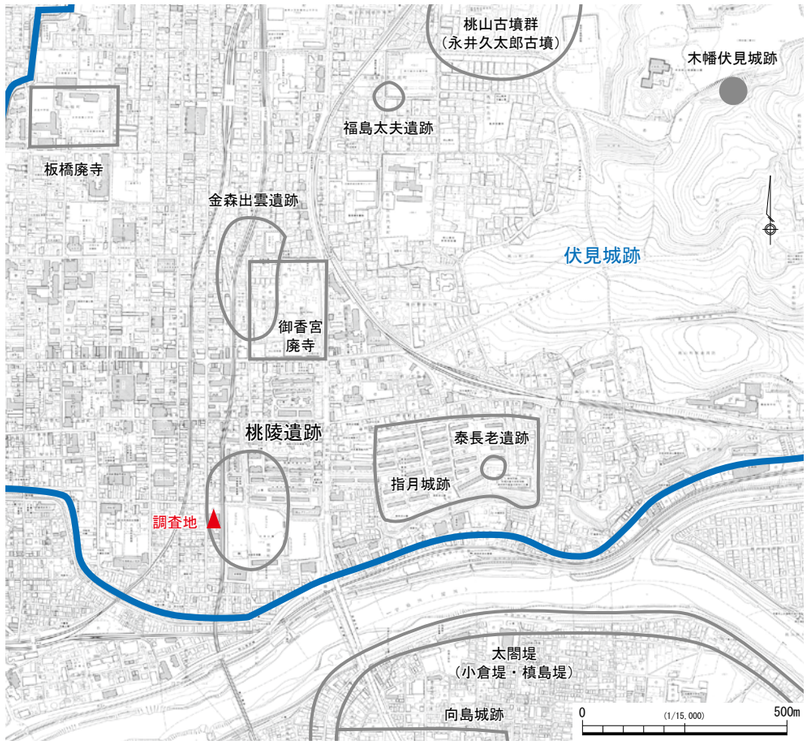
調 査 地　京都市伏見区京町 1-245
調査期間　平成 27 年 11 月 2 日　～　平成 27 年 12 月中旬（予定）
調査面積　約 131㎡
調査原因　新社屋増築
計画機関　株式会社　ラプラス・システム　(http://www.lapsys.co.jp)
調査機関　有限会社　京都平安文化財　(http://iseki-hakktsu.com)

1. はじめに

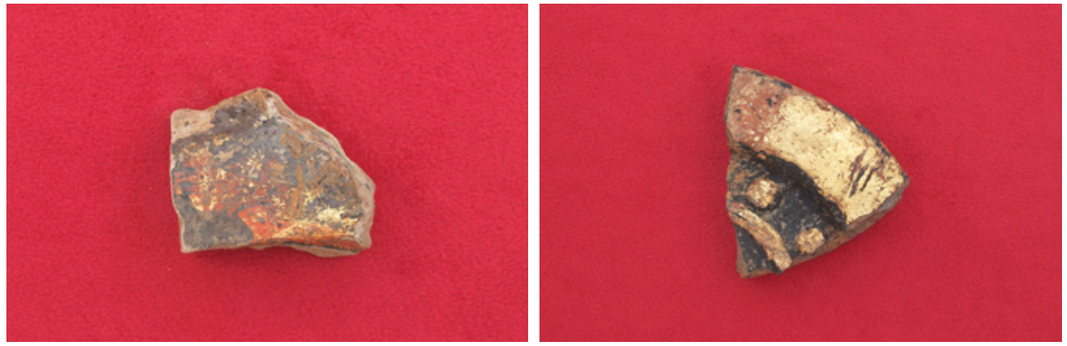
今回の調査地は、豊臣秀吉が天正 20 年（1592）に築き始めた伏見城の城下町にあたります。伏見城の外堀で囲われた範囲は、桃山丘陵の南端部に築かれた壮大な城郭と、その西に広がる城下町からなります。この度、遺跡地内に所在する事業所の社屋増築に伴う埋蔵文化財の発掘調査を、京都市の文化財保護課の指導と事業主の協力を得て実施しています。

2. 調査成果

調査地は、城下町の南北の主要道路である京町通の東側で、『伏見桃山御殿御城之画図』では、京町通に面した町家の街区のように表されています。また、事業所既存社屋の建設に先立つ発掘調査（平成 5 年）では、当初の京町通の路面と東側溝とみられる遺構などが検出されています。



周辺遺跡における調査地位置図（1：15,000）



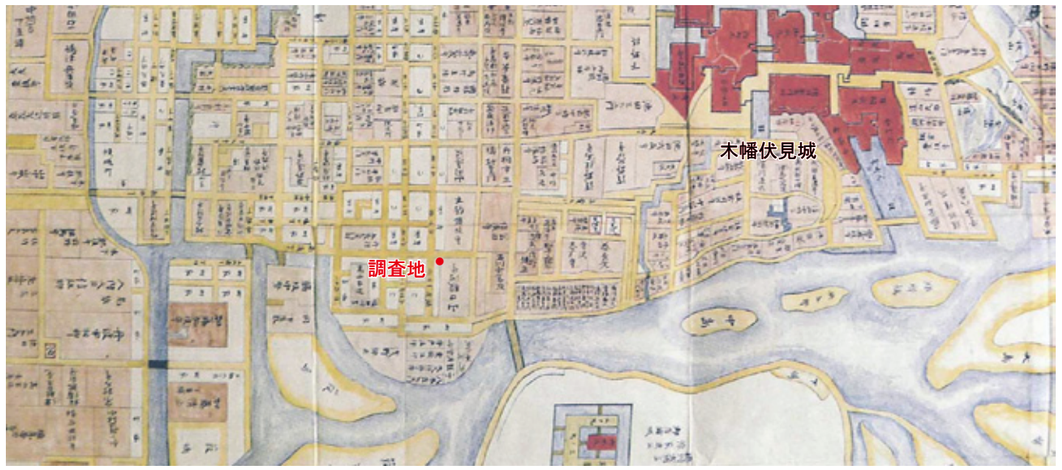
遺構４０(土坑) 出土　金箔瓦

今回の調査はこれを受けて、この地の土地利用の変遷などを明らかにする目的で実施しました。調査の結果、調査区南端部で現代の盛土層の直下から、面を北に向けた東西方向の石列が検出されました。石列は、町家建物北面の土台縁石とみられます。調査区の東寄りと西寄りの石列は若干の食い違いがありますが、これは主屋と離れ屋にあたると思われ、京町通に面して間口を開く町家の遺構と考えられます。この石列の下から、礎石の列が検出されました。ほぼ同じ位置に並ぶことから、前身建物の可能性があります。

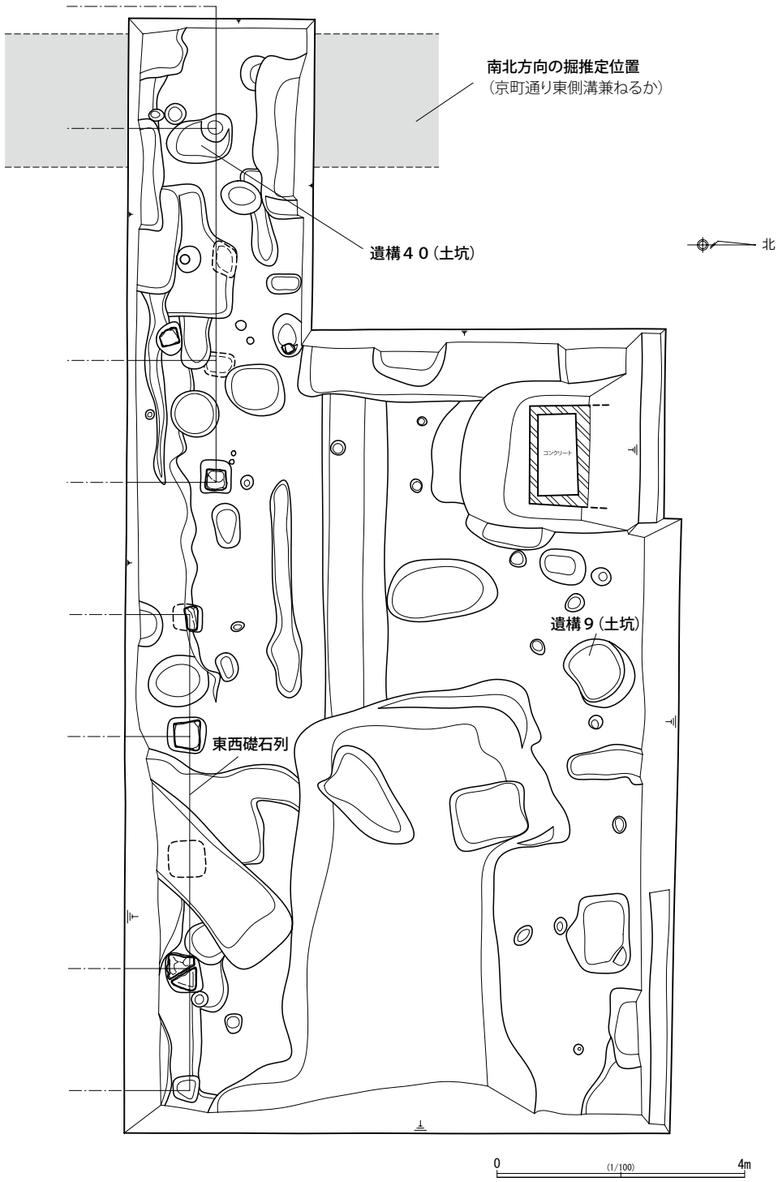
調査区北半部では、大規模に造成された整地層が検出されました。整地層の上面は削平を受けているようですが、調査区南半部の遺構検出面より 50 ～ 60 センチ高くなっています。伏見の城下町は、東から西に下る傾斜地になっているため、都市計画に基づき各所で西に下る雛壇状に宅地面の造成がなされたと考えられています。また、伏見丘陵は南へ下る傾斜を有する所もあり、大手筋より以南の京町通沿いでは南側がゆるやかに下る形での造成の調整もされているようです。

今回の調査地点では、南側は南北方向の京町通に面する宅地、北側は東西方向の立石通に面する宅地で、南北に段差を持っていたことが確認できました。

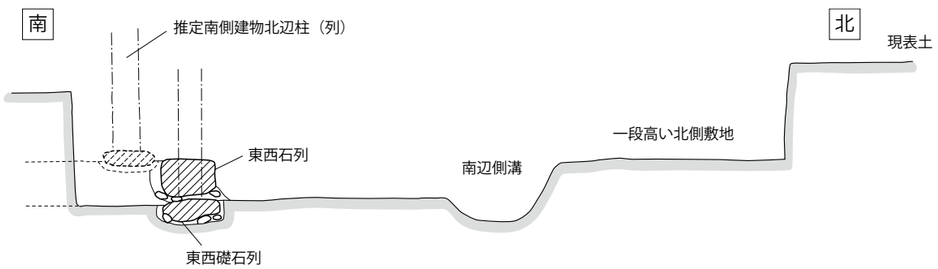
また、江戸時代の土坑からは土器や陶磁器類のほか、金箔瓦片や明代の銅銭などの遺物が出土しています。さらに、整地のためにおそらく近隣から運ばれてきた土の中には奈良～平安時代の土器や瓦が含まれていて、古代以来の伏見の歴史を窺わせます。



伏見桃山御殿御城之画図（神戸市立博物館蔵　南波コレクション）



調査区 平面図（1：100）



東西石列・東西礎石列の南北断面概念図

3. まとめ

調査はまだ継続中で、京町通の側溝の検出などの作業を続行していますが、現時点での調査成果として、調査地内に南北に段をつくる造成の様子や、京町通沿いの町家の遺構、また旧地形が北東から南東に緩やかに傾斜する様子などが分かり、この地の歴史的な変遷の一端が明らかになってきました。

調査第１面　全景（南東から）

調査第２面　全景（南東から西やや北を望む）

調査第１面　東西石列（東から）

調査第２面　東西礎石列（東から）

調査地南隣地の京町通り沿いの路地
（京町通り側から西方を望む）

調査地北方の京町通りと交差する毛利橋通り沿い宅地の基礎縁石列（北から）